
最弱の勇者

安部高戸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最弱の勇者

【Nコード】

N8960S

【作者名】

安部高戸

【あらすじ】

歴代最弱の勇者とその仲間たちによる冒険譚。
力は僧侶、身の守りは魔法使い、素早さは戦士、HP、MPはそこそこ、そんな勇者のお話。

2011年 5月14日から毎週土日更新を目標としています。

001 勇者の一人旅において、後書きに書かれたステータス、及び装備の変更を行いました。

改稿版である『最弱の勇者　く死にたがり勇者と生への枷く』を書き始めたため、こちらを消そうと思っていましたが、消すとサイトさんに迷惑がかかるようなので残しておきます。

000 プロローグ

力は僧侶、身の守りは魔法使い、素早さは戦士、HP、MPはそこそこ。そんなステータスを持つ歴史上最弱の勇者の話。

「全く、勇者はよええよな」

「ほんとですよね」

「雑魚」

「お前ら、酷すぎだろ！」

「だって事実じゃん」

「事実ですよね」

「客観的事実」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「やーい、雑魚」

「本当に雑魚ですよね」

「雑魚、雑魚」

「・・・・・・・・お前らなんて、きらいだあああああああ！！」

「あ、ゆ、勇者！？」

「ちよっと、冗談ですよ！！ 確かに勇者は弱いけど・・・・って、これじゃあ単に傷に塩擦り込んでるだけですか、もしかして！？」

「雑魚！ 雑魚！！」

「「あんたも少しはフォローしろ！！」」

「うわあああああん」

「ああ！ 勇者待ってくれ」

「そうです。さっきのは宣伝みたいなもので・・・・掴みのセリフなんですよ！」

「・・・・置いてかないで」

そんな、
弱っちい僕と仲間達の話。

001 勇者の一人旅

名前 トウヤ・ツキシマ

職業 勇者

HP 174

MP 82

力 46

身の守り 41

素早さ 38

レベル 31

「……これはねえわ」

僕は溜息を吐きながら、ステータスの巻物をしまって地面に寝転ぶ。

僕が今いるのは、コビラ大陸の北北西。マイリ村の近く。そこで僕は野営をしている。

野営と言っても、一人しかいない僕には休まる時間は無く、ただ朝が来るのを待っているだけなのだけれど。

仲間はいない。

いや、もういない。

別に、仲間が死んでしまったという訳ではない。

僕の故郷であるレアオル村を北に行き、ホルク城にたどり着いた僕はホルク王に選ばれた勇士達の中から戦士、僧侶、魔法使いの三人を仲間にした。

そして、ホルク城から遙か北のガダイの港町まで辿り着き、僕達のパーティーは解散したのだ。

理由は簡単だ。僕が弱いから。

僕は旅の中でまるで役に立たなかった。いや、それどころか足を

引っ張ってばかりだった。

三人で戦った方が遥かに強い。

それは客観的に見ても明らかだし、僕や仲間達もそう認識していた。

「勇者はこれからだよ」

「すぐにでも俺に追いつくさ、なんたってお前は勇者だからな」

「気にしなくてもいい」

そう、仲間達は励ましてくれていたけど、僕のレベルが20を過ぎてても一向に伸びないステータスを見て仲間達の目はどんどん僕を見下すようになった。

仕方のない事だ。だって勇者は仲間の誰よりも強くなければならないのだから。

戦いの激しさが増すにつれて、仲間達の中にある不安が増していったのも仕方のない事だ。

こんな勇者では魔王に勝てない。

それは、当然の結論だろう。

僕の先代である勇者アルゲイルは歴代の中でも1、2を争うほどの実力者だった。

記録に残っているステータスを見ても、

名前 シーク・アルゲイル

職業 勇者

HP 265

MP 145

力 124

身の守り 96

素早さ 78

レベル 30

という、全てにおいて僕を遥かに凌駕していた。
その彼はもういない。

彼は魔王に辿り着く前に、魔王の部下によって殺されてしまったからだ。

彼に倒せなかった魔王に、それどころか辿り着けなかった魔王に、歴代の勇者の中で最も弱い僕が勝てると思う方がおかしいだろう。

僕の仲間たちは諦めようと言った。

諦めて、旅を辞めてしまおうと言った。

旅を続けるのが怖かったのだろう。

死ぬのが怖かったのだろう。

魔王が怖かったのだろう。

僕は彼らを責めるつもりは無い。

僕だって怖かったのだから、当然だ。

逆に黙って僕の前から逃げずに、僕と一緒に生きる道を選ぼうとしてくれたことの方が嬉しかった。

だけれど、僕は彼らの提案を蹴り、一人魔王を倒す旅を続けていく。

もう、かれこれ三月目だ。

よくもまあ、生きていると僕は僕自身に感心する。

移動速度は仲間達がいた頃の五分の一まで下がり、何度も命辛々の戦闘を続けながら、よくもまあ生きていると思う。

無駄に生命力が強いのもかもしれない。

まだ死にたくない。

そんな、願望を僕は持っているのかもしれない。

だけれど、僕は旅を続けなければならない。

なぜなら、勇者は世界に一人しか生まれないのだから。

僕が生きている限り、次の勇者は生まれない。

だから、僕は早く死ななければならぬ。

魔王を倒す、そんな勇者が生れると信じて……僕はこの旅を

続ける。

せめて勇者として死ぬ為に、僕は旅を続ける。

001 勇者の一人旅（後書き）

現在のトウヤのステータス

名前 トウヤ・ツキシマ

職業 勇者

HP 174

MP 123

力 46

身の守り 41

素早さ 58

攻撃力 146

防御力 124

レベル 31

装備

武器 父の剣 攻撃力+100

盾 無し

防具 鋼鉄の鎧 防御力+54

兜 颯の兜 防御力+29 素早さ+20

装飾品 魔術師の腕輪

特殊装備説明

父の剣

攻撃力 +20→+140

絶対に返すようにと持たせてくれた、昔父の使っていた剣（刀）
刀という特殊な形状をしており、使いこなすには難しい。

その為、攻撃力には幅があり、昔からこの剣を使っていたトウヤに

はある程度使いこなせる。

片手装備時は＋20～＋60 両手装備時には＋40～140までの攻撃力になる。

現在のトウヤの使った場合の攻撃力は100。

この付近で装備できる剣と比べると倍近い攻撃力を持つ。

颯の兜

風の聖霊によって守護された兜。

まるで羽のように軽く装備者に風の聖霊の恩恵を与えられている。

魔術師の腕輪

魔力の蓄積を可能にした腕輪。

装備者の半分の魔力を蓄積が可能であり、現在のトウヤのMP82に対して腕輪にはMP41分の魔力が籠められている。

又、他人の籠めた魔力は使用できない。

002 村にて

大きな危機は無く、無事にマイリ村に僕は辿り着いた。

「一人でこんな辺境まで旅して来たなんて、お強いんですね」
「いえ、そんな事は無いですよ」

宿屋の主人はそう言っ僕を部屋まで通した。
僕が勇者である事は話していない。
今の僕には、人々の期待は重過ぎる。

「ふう」

僕はベットの横に荷物を下ろし装備を脱いで、そのままベットに座る。

さて、これからどうしようか？

まずは、魔物を倒した時に得た毛皮や角等の資材を売るのは最優先だろう。

このままではかさばって仕方がない。早々に処分した方がいいし、こういった面倒なものを先送りにするのは好きではない。

まあ、その後は村長さんのところに挨拶にでも行こう。

「そんじゃ行きますか」

立ち上がろうとした時、バタンと大きな音がした。

「？」

なんだろうと耳を澄ませてみると宿屋の主人の声ともう一人の声
が聞こえ「冒険者は何処にいる？」「あちらの角の部屋です」とい
う風に会話しているのが聞こえ、ドスドスと廊下を歩く音が聞こえ
る。

三年旅してきた勘から、これは面倒事になりそうだなと僕は他
人事のように思った。

バタン

もう少し静かに開けてもいいだろうと思わせるほどの勢いで開け
られたドアの先に、こんな辺境の小さな村には似つかわしくない派
手な服を着た小太りの男が立っていた。

「お休み中、失礼します」

そんなことを言う位ならまずノックくらいしたらどうかと思ったが、
そんな事は当然口にはしない。

「いえ、今から出かけようと思っていたところですのでお気になさ
らず。それで、何かご用でしょうか？」

と、僕は言った。

「正しくその通りです。冒険者様。私はこのマイリ村の村長のデコ
リ・ヒレダスと申します」

そう言って彼、デコリさんは深々と上品なお辞儀をした。

それにしても、村長とは・・・会いに行く手間は省けたが、本格
的に面倒な話になりそうである。

「僕はトウヤ、苗字など持たざる下級な旅人です。こんな僕に何かご用でしょうか？」

僕は彼に習って名乗り上げる。

その名乗りを聞いて、デコリさんは露骨に嫌な顔をした。

苗字を持たざる者とはそれは即ち下級平民や奴隸達を指す言葉なので、こういった位の高い人物の中には嫌悪感を隠さない人も多いのだ。中には中級平民のくせにそういった顔をする人もいたりする。僕が本名を名乗らなかったのは、勇者の呼び名を知っていた場合に備えての事である。一般的に勇者の呼び名は勇者を出した家名を世に知らしめる為苗字の方、つまり僕の場合は勇者ツキシマとして広く一般に知らせられるので、知っていた場合僕が勇者である事がバレてしまうだろう

これ以上面倒事が増えるのは困る。

「・・・失礼、お気を悪くしたでしょう。

全く、今だにこういった悪癖が抜け無くて困る」

デコリさんは自分の表情に気づいたのだろう。

顔をバチンと一度叩くと表情を引き締めた。

「いえ、お気になさらず」

「・・・トウヤ殿は器が大きいですな。

私など、まだこういった悪癖が抜けず、村長として失格です」

デコリさんは苦笑いを浮かべる。

その様子を見て、僕はデコリさんへの印象に少し変更を加えた。

「それで、何の御用でしょうか？」

「ああ、はい。実はお頼みしたい事がありまして・・・詳しい話は

和が家でお話ししましょう。馳走も用意しますので話だけでも聞いてはいただけないでしょうか？」

そう言って、デコリさんは僕の様子を窺う。

家に招待してご馳走まで用意する。こんな事をされた後に頼みを断る事など実質不可能だろう。これで話だけでも言うのだから、この男は中々したたかな男だ。

「ええ、お話だけでいいと言うなら喜んで伺いましょう」

「おお！ そう言って貰えると助かります。

さあさあ、行きましよう。家内が馳走を用意して待っているはずで
す」

そう言って、急かすようにデコリさんは僕の背を押す。

「ああ、その前に」

「？ はい、なんでしょうか？」

デコリさんはパチクリと瞬きをして僕を見る。

「申し訳ありませんが、資材を売るようなところは何処にあるのでしょうか？ この嵩張る荷物を処分したいのです」

そう言って、僕は床に置いた荷物を指さす。

「ああ、そうでしたか。

それならば、あそこの角に並んだ武器屋と防具屋に売るといいでしょう。ご案内しましょうか？ 私が行けば少しは割高で取引してくれるでしょう」

「それは有り難い。ぜひ案内してくれませんか？」

「お安いご用ですよ」

僕は荷物を担ぐとデコリさんの後について歩く。

武器や防具はいいけれど、薬草類や包帯、携帯食料を補充しておくべきだろう。

なにせ、村長が冒険者に用がある事など、揉め事や魔物退治ぐらいしかないのだから・・・

003 洞窟の魔物

「ご馳走と言うに相応しい食事を持て成され、僕は満足して食後に出された・・・これはなんだろう？ 赤い液体でとてもいい香りがする温かい飲み物を飲んでいた。

そこに丁度、この屋敷のメイドさんが配膳を片づけに来たので聞いてみる。

「ああ、それは紅茶と言ってとても香りのよい飲み物でございます」

そう言って、彼女は奥の部屋へと戻って行った。

ふむ、こうちゃと言うのか・・・しまった。どういう漢字を書くのか聞きそびれてしまった。

こうちゃ、高茶、光茶・・・なんだかどれもしっくりこない。

「満足してただけでしょうか？」 そう言って、何やら大きな袋を持ったデコリさんが戻ってきた。

「ええ、とても美味しい食事でした。ところで、この飲み物は一体何なのでしょうか？ 今まで飲んだ事のない飲み物です」

「ああ、それは我が村の特産品である紅茶です。とても香りがいいでしょう？ このお茶はグレルリア国王陛下にも献上するほどの上質なものなんですよ」

デコリさんはまるで出来の良い我が子を自慢でもするかのように、ニコニコと饒舌に語る。

なるほど、デコリさんの派手な服装に合点がいった。

国王陛下に献上するお茶なんて一体どれ位するか分かった物ではない。

ちなみに、グレルリア王国はここより西の山を越えたところにある。

「それはすごいですね、国王陛下にとは・・・ちなみに、こうちゃとはどういった字を書くのですか？」

「紅のお茶と書いて紅茶と読みます。まるで染めたように鮮やかな紅色でしょう？　そこから由来するそうです」

「なるほど」

紅茶、と書くのか。

確かに、見事なまでに赤く、紅色に染まっている。

僕は紅茶をもう一度口に含み、ゆっくりと飲み下す。

「とても美味しいです」

「ありがとうございます」

デコリさんは、本当に嬉しそうに笑った。

その後、数分紅茶を片手に談笑し、話が途切れたところでデコリさんは切り出した。

「それではトウヤ殿、本題に入らせて貰ってよろしいでしょうか」

「ええ、僕もそろそろその袋がなんなのか気になってきました」

「はっはっ、そうですか。それじゃあ先にお見せしましょう」

デコリさんは、袋の日身に手を掛けるとスツと口を広げ、中身が僕に見えるようにと前に出す。

「・・・大金ですね」

「5000ガルあります」

先ほどの柔らかな笑顔は無く、真剣な表情でデコリさんは僕を見据える。

「実はこの村の裏に小さな洞窟があります。そこに最近になって魔物が棲み付いてしまったようなのです」

「・・・それを退治して欲しいと？」

「はい」

デコリさんはそう言って、お金の入った袋を僕の前に置く。

「こちらのお金はお渡しします」

「良いんですか？ 持ち逃げするかもしれないですよ？」

「持ち逃げするような人はそんなことを言わないでしょう。それに持ち逃げするならそれでもかまわないのです」

「？ どういう事です？」

僕の問いにデコリさんは一つ大きなため息を吐いて。

「実は一週間ほど前にも、村の若い者二人が洞窟の魔物の退治を買って出たのですが・・・彼らは失敗し逃げ帰ってきました。命に別状は有りませんでした。ひどく怯え、今も夜遅くには幻覚を見るのでしよう・・・悲鳴を上げて飛び起きているようです。」

丁度、あなたの泊まっている宿の隣の家に住む兄弟です」

そんな話を聞いて、平静を保ってられる奴がどれほどいるだろうか？

僕はぐくりと唾を飲み込んで、表面上の平静保つ事しか出来なかった。

「一応、その二人以外村の住民には被害は出ていません。幾つかの

野菜や果物が盗まれたりするだけでした。ですから、私共もそんな恐ろしい魔物が棲んでいるなんて思いもせず、彼らを送り出してしまいました」

そう言ってデコリさんは今は後悔しています。と、苦痛の表情で言った。

「ですから、これは成功報酬ではなく、前金です。失敗しようこの話を聞いて逃げてもらってもお支払いします。命を懸けて戦うにはあまりに少ない金額ではありますが、なにとぞよろしくお願いいたします」

そう言って、デコリさんは頭を下げる。

5000ガルの命を懸けて戦うのに安いという事は無い。

5000ガルもあれば、1年は豪勢な生活さえしなければ余りあるほどの金額だろう。

それを前金として払い、逃げてもいいと言うのだ、お金を持っているとは言え、こんな事を早々できる事ではない。

今は500ガルの為に人を殺すなんて事件が起きるような時代なのだ。

「デコリさん顔を上げてください」

僕は、目の前にある袋を掴んだ。

それを見て、デコリさんは安心するような、それでいて心配するような顔を僕に向けた。

僕はそんなデコリさんの目を見て、言う。

「退治した暁には、一体幾らの報酬が頂けるんですか？」

にやりと笑った僕を見て、デコリさんは驚いたように大きく目をパチクリとし。

「ええと、前金の倍、10000ガルお支払いしましょう」

と、慌てて言った。

「お引き受けしましょう」

僕はまるで簡単な仕事だとも言うように、不敵に笑って右の手をデコリさんに突き出す。

デコリさんはその手を掴んで、ブンブンと振った。

「お願いします」

僕はその真剣な表情を見て小さく笑う。

正直に言おう、僕はその魔物に勝てるかなんて全く分からないし、まるで自信も無い。

だけれど、これ以上に勇者の最後として相応しいものも無いのではないかと、僕はそう思った。

翌日の明朝、僕は装備を整え洞窟へと向かった。

夜の内に向かおうとも思っただが、デコリさんが酒を振る舞ってきたのでそれは断念せざるを得なかった。

冒険者に祝福をなんて言われて酒を出されて飲まない訳にはいかないだろう。

幸い、デコリさんは酒に弱く、僕は人並み以上に酒には耐性があ

ったから（戦士に付き合わされて5軒はしごなんてのもやっていたし）翌日の明朝に無理無く起きて、洞窟へと向かう事が出来た。

デコイさんかというと、すらりとした貴婦人を思わせる優しげな奥さんと活発そうな娘さんにずるずると引っ張られて寝室へと運ばれていたので、きっと今頃は二日酔いに苦しんでいることだろう。ご愁傷様である。

「ここか」

デコリさんに言われた通り、村の裏の森の奥。禍々しい・・・感じはしないが、それっぽい洞窟がぼっかりと口を開けていた。

「さて、鬼が出るか蛇が出るか・・・」

僕は光呪文『フラッシュ』を唱え、左手に固定術式を展開した。本来は相手の目を眩ますほどの光量を放つ『フラッシュ』だが、固定術式を展開することで、安定した明かりを出す光源へと変化させることができる。

まあ、洞窟探索に使う初歩的な魔法の応用である。

僕は、『フラッシュ』が固定されたことを確認して、中にへと足を進める事にした。

さて、どれくらい彷徨っただろうか？　そこまで複雑な構造をしていなかった為、恐らくここだろうという親玉が潜んでいるであろう場所は思いの外早く見つけた。

まあ、親玉なんて言う可他にも手下っぽいのがいたように言い回しになってしまうが、そう言う訳ではなく、逆に一匹たりとも魔物がいないという現実には少々拍子抜けしてしまった。

居たら居たで嫌だが、身構えているところに出て来られないのも考え物である。

とはいえ、この先には間違いなく何かがある事は確かだ。
証拠に、

「ぐああああ、ぐあああああ」

という、獣めいた寝息が聞こえてくる。

さてさて、一体何がお出ましするのやら。

僕は息を殺し、愛刀を鞘から抜き放つ。

三年付き合ってきたこの父から借りた刀は、いつまでも切れ味が落ちることなく（もちろんメンテナンスは欠かしていない）美しい光沢を放ち続けている。これを僕は『父の刀』と呼んでいるのだが、その理由はこの刀のどこにも名が無いという不思議な理由からだ。

これだけの刀なのだから間違いなく腕のある鍛冶職人によって作られたものだと思うのだが、どこにも名が無い。

もしかしたら、埋もれてしまった名工によって作られた逸品なのではないかと、僕の中では結論づけている。

「ふううー、そんじゃ行きますか」

そんな愛刀を見て心を落ち着かせ、僕は覚悟を決める。

個人的には寝込みを襲うのはさすがに魔物といえど可哀想なのが、この際仕方がない。寝ている方が悪いのだ。（洞窟に向かったのは明朝だが、今はもう昼前である）

せめて、こちらの存在を示したうえで攻撃しようと一步目を踏み出した時。

カラン

カラン

カラン

カラン

カラン

カラン

カラン

洞窟内の至る所からそんな乾いた音が反響する。

「なっ!？」

驚いて足を上げると、そこには黒く染め上げられた細い糸が数本、丁度足を故意にあげようともしない限り避けられないように張り巡らされていた。

罨。

そう考えた瞬間、僕の額から一筋の汗が垂れるのを感じた。

ま、まさか、かなりの知能を持った魔物なのか!？」

や、ヤバイ。これはさすがに想定の範囲内を超えている。一個人で勝てるとかそう言うレベルの敵じゃない。こんな魔物が村の近くにいるなんて、アリジゴクだらけの場所に蟻の巣があるみたいなんだ。一人残らず食われてしまう。

勇者らしく死ぬとかカッコつけている場合じゃない。ここは何としてもここから脱出して、1パーティーいや、軍で殲滅作戦を行うぐらいの気持ちで臨まないと勝てない。

逃げる。

全身の隅々にまでその指令が出された僕は、硬直していた体に力を籠めようとした時。

「むにゃあ、だあれ？」

という、不機嫌そうな女の子の声を聴いた。

「・・・・・・はあ？」

当然、僕は耳を疑った。

確かに、魔物の中には喋るタイプのものもある。だが、魔物の声と言えば、低いうるような声とか、逆に耳触りのような甲高い声のように大凡人の出せるような音を出さない。

それが、この声はなんだ？　まるで眠りを邪魔された少女のようなこの声はなんだ？　まさか魔物にもこのような声を出して人を騙すような恐ろしい奴もいるとでも言うのか？

「ねえ、誰？　おっかしいな・・・獣払いはあるはずだし、今度こそ誰も入ってこれないはずなのに・・・」

声の持ち主が動く気配がする。

だけれど、僕にはもう逃げるという選択肢は無くなってしまっていた。

一体こんな声を出す魔物は一体どんな姿をしているのだろうかという好奇心によって、僕の脳味噌は正常な判断が下せなくなってしまうっていた。

だけれど、それは間違っていないなかったのかもしれない。

「え？」

僕の目の前に現れたその姿は、大凡魔物のような姿ではなくそれはそれは美しい白銀の髪を持つ少女の姿だったのだから。

003 洞窟の魔物（後書き）

今回使用した魔法

フラッシュ 光魔法 消費MP 4

辺りが真っ白になるほどの強力な光を生み出し、敵の目を眩ませる。仲間に合図もせずを使うとまず間違いなく仲間にも被害が及ぶため使用には注意が必要。

今回使用した特殊技能

固定術式 応用魔法

呪文に一定の枷を付けることにより、その効果を安定、持続させる応用魔法。

今回のフラッシュでの応用例でいうと『左手を発光させる』という枷を付け、洞窟探索での灯りにしていた。術式固定にはかなりの多様性がある。

004 洞窟に住む者

「え？」

僕の姿をとらえた瞳は、まるで凍りついたように固定された。
僕はどうにも居た堪れない気持ちになって、

「ど、どうもこんにちは」

と、とりあえずコミュニケーションを図ってみた。

「あ、はい。こんにちは？」

そう言って、彼女は小首を傾げて、

「おはようではないのか？」

と、少々の外れな事を言い出した。

「いや、今はもう昼前だし、おはようではないと思う」

「ああ、そうなのか。また、寝過ぎしちゃったのか」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

またも、沈黙が流れる。

ああ、なんだこの状況は、僕は魔物退治に来たのではなかったのか？
なぜ僕は女の子と面と向かってこんな居た堪れない気持ちになっ
ているんだ。

僕は、このよく分からない状況を作り出している彼女を上から下

まで眺める。

白銀の透き通るような長い髪、それにちょこんと付いた獣の耳のようなもの。彫刻のように整った顔。見るものを吸いつけるような美しいラインを描いた鎖骨。そして緩やかにそれでいて柔らかな印象を持たせる胸。丁度両の手を添えたくなるような腰の括れ。一定のリズムで振られる獣の尻尾のような白銀のそれ。健康的でかつバランスのとれた脚。・・・ん？

僕はもう一度上から下へと視線を送る。

髪、獣の耳、顔、鎖骨、胸、腹、括れ、獣の尻尾、腰、太腿、足。もう一度送る。

獣の耳、獣の尻尾。

ピコピコ。ワサワサ。

・・・動いている。

「何故動く！！　なんでそんな物が付いているんだ！？」
「うわああああ！！　なんで刃物なんて構えてるんだよ！？」

僕と彼女の叫びはほぼ同時だった。

そうして、詰め寄ろうとした僕と飛び退いた彼女の動きも、まるで計ったかのように同時だった。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「分かった、この刀は置こう。それでいいか」

「・・・・・・・・うん」

僕は刀を鞘に納めて、地面にそつと置いた。

「と、とりあえず、話をしないか？」

「い、いいけど、とりあえずその剣から離れてくれない？　怖くっ

てしゃあないんだけど」

「ああ、すまない」

僕は一度刀を拾って、壁際まで持っていき立てかけてから元の場所に戻る。

「これでいいかい？」

「う、うん」

「ええっと、それじゃあ僕から、僕はトウヤ・ツキシマだ。君は？」

「わ、私はギンカだ」

「そ、そうか、よろしくギンカ」

「ああ、こちらこそだ、トウヤ」

「・・・・・・」

「・・・・・・」

「あの、つかぬ事を窺うんだが」

「な、なんだい？」

「そ、その頭に付いているものと、し、尻尾のようなものは何なんだろうか？」

耳はピコピコと動き、尻尾の方はまるでたわわに実った稲穂の様に大きく広がっていた。

「なんなのだろうかなんて言われても・・・耳と尻尾としか言いようがないんだけど・・・・・・」

ギンカは困ったように頬を掻いていた。

「もう一つ、伺いたいことがあるんだが・・・」

「な、なんだい？」

ああ、もうこんな事聞くまでも無く分かっていることじゃないか・
・ 獣の耳、獣の尻尾、こんなものが付いている奴なんて僕は心当たりは一つしかない。

「君は、魔族なのか？」

そう、魔界に住むといわれる。彼ら以外。

「うん。正確に言えば、魔族の獣人だけだな」

そうして僕は、生まれて初めて魔族と出会った。

005 魔族

「・・・魔族」

息をのんで僕はもう一度、彼女の頭についているものと、お尻についているもの。いや、頭に生えた獣の耳とお尻から生えている尻尾を見る。

耳の方はピコピコと忙しく動き、尻尾の方は先ほどとは打って変わって萎んでだらんと地面に垂れていた。

「あ、いや、その、別に取って食ったりしないから、攻撃とかは無しにして。私、痛いのは嫌だ」

ギンカは慌てたように言う。

まあ、魔族Ⅱ人を食うみたいな考えが世間一般で言われているが、僕が知っている話では魔族は別に人間を好き好んで食べたりしないと聞いている。

この話は勇者達が語り継いでいるもので、広く一般には知られていないが実際魔族を見てきた彼らの言葉なのだから疑わなくてもいいだろう。

「ほ、ほんとだからな！」

僕が黙っていると、疑われていると思ったのだろう。更に慌てるようにして、ギンカは自分の安全性を強調する。

身振り手振りを使って「こんな小さな口で人間なんて食べれない」とか「肉より果物や野菜の方が好き」とか、そんな言い訳になっているのか分からない事を懸命に僕に説明する彼女を見ていて、僕は

肩の力が抜け、思わず笑ってしまった。

「何笑ってんだ？」

急に笑い出した僕を見て、ギンカは困惑したような顔をしている。

「いや、魔族がこんな可愛い奴だったなんて知らなくてね」

「へ？」

僕が正直に感想を言うと、ギンカは惚けた顔をしたかと思ったら急に顔を赤くした。

「な、なに言ってんだよ！」

そう叫ぶと、ギンカは僕からそっぽを向く。

照れているらしい。

尻尾もバツサバツサと大きく揺れている。

犬で考えたら大喜びしていると考えていいだろう。

可愛い奴である。

「いや、魔族が可愛いんじゃないな。ギンカが可愛いんだな、きっと」

調子に乗って僕は更に褒めてみた。

「ううっ!？」

すると、ギンカの顔は更に赤く染まる。

僕も更に調子に乗る。

「その尻尾とかなんだか柔らかさそうだよね、触っていてもいい？」

「や、やあ！ それは駄目だ！！ し、尻尾は駄目だ！！」

「じゃあ、耳は？」

「それはもっと駄目だ！！」

「じゃあ胸なら良いのか？」

「それなら・・・もっとダメだろお！！」

顔を真っ赤に染めてギンカは叫んだ。

・・・面白い。

「この変態め・・・」

僕を睨んでギンカは唸るように言う。

「失敬だな。からかっただけじゃないか」

「もっと性質が悪いわ！！」

噛みつくように僕にそう言い放つと「なんだよ、照れて損した」と不満そうに小さく呟いた。

全部本音だと言ったらどうなるのだろうか？ 気になったが、本格的に変態扱いされそうなので自重しておいた。

人を弄るのは腹八分目までがベストなのである。

主に僕に対する評価的な意味で。

「・・・それにしても、トウヤ。あんたは私を見ても怖がらないんだね」

さすがに初対面でここまで弄ったのはやりすぎだったのだろうか？ と、個人的な反省会をしていた僕に、ギンカは嬉しそうな顔をして言う。

その顔を見て、うつかりときめいてしまった。
無防備な笑顔と言うのは非常に、こう、くるものがあるのだ。

「いや、最初は怖かったさ。魔族なんて初めて見たからね」

・・・さすがに、これ以上悪ふざけはしない。

「そう言う割には、冷静だったと思うけど」

「ああ、それは初めはここに恐ろしい魔物がいるって聞いていたからだろう。まさかギンカみたいな可愛らしい魔族がいるなんて思わなかったから、そういった意味では冷静だったかもしれない」

「またお世辞言って・・・そろそろ怒るよ?・・・って魔物?」

そう言って、ギンカは首を傾げる。

「おそらく、君の事だろう」

「私が、魔物?・・・勘弁してよ」

そう言って、ギンカは心底嫌そうな顔をした。

「あんな気味の悪い連中と一緒にされたら嫌だよ。

あいつらが嫌いなのは人間だって、私ら魔族だって同じなんだぞ。

あんなのと一緒にされたら嫌だ」

「それはすまなかったが、野菜や果物を盗んでいたのは君だろう?」

「うっ!」

痛いところを突かれた顔をして、ギンカ黙った。

「やっぱり、そうなんだな」

はあ、と僕はこれ見よがしに溜息を吐くと、ギンカは慌てて言い訳を言う。

「で、でもちゃんと傷んだのを持って行ってたんだ。少しでも迷惑かけないように」

「持っていく時点で迷惑だろうが」

「・・・そうだね」

僕が指摘してやると、しょんぼりと身を小さくした。耳も尻尾も力なく伏せている。

・・・可愛いと思った僕は駄目な奴なのだろうか？

「でも、お腹すいてたんだ」

ポツリと、ギンカは呟いた。

「気になっていたんだが」

「・・・なに？」

「どうして、魔族のお前がこんなところに居るんだ？」

それは、ギンカが魔族だと分かった当初からの疑問だった。

少なくとも、僕にはこの近辺に魔族の種族が暮らしているという話は聞いたことが無かった。

「そ、それは・・・」

今までの反応とは違い、僕と目を合わそうとせずギンカの視線はキョロキョロと忙しく宙を泳いでいた。

「・・・いや、忘れてくれ」

「え？」

「別に言いたくない事を聞き出そうとは思わない」
「・・・ありがとう」

そう言って笑うギンカの顔は酷く寂しそうなものだった。

006 犬ではなく狼

「へえ、それじゃあトウヤは魔物退治に来たんだ」

ここに來た経緯を話すとギンカはそう言つて、感心するように僕を繁々と眺める。

「まあ、実際は魔物じゃなくて私だったって訳だけどね。

それにしても、一人で魔物退治に行こうだなんてトウヤは強いんだね」

「いや、そうでもないよ」

「うん？　じゃあなんで來たのさ？」

ギンカは首を捻つて尋ねてくる。

さすがに自殺願望とは言えない。

「金に目が眩んだんだよ」

「そうなの？　あんまりそういうタイプには見えないけど」

「人は見かけによらないっていうだろ？」

「確かに、トウヤは見かけによらず変態だったな」

ニヤニヤとしながらギンカは言う。

どうだと言わんばかりの表情である。

・・・それでからかっているつもりなのだろうか？

「なんてったって前金5000ガルに成功報酬10000ガルだぞ？　そりゃあ飛びつくさ」

「あ、あれ？」

「？　どうしたんだ」

「えっ!？ な、なんでもないよ・・・って100000ガル!？
すごい大金じゃないか」

「ああ、でもそれは成功報酬だ。つまりギンカを退治したら貰える
訳だ」

スツと目を細めてギンカを見る。

「え・・・じょ、冗談だよね？」

引き攣った顔でギンカは僕の様子を窺う。
それを僕は無言でじっと眺める。

「う、ううつ・・・」

ギンカは身を小さくして呻く。
さらに無言。

「キューン キューン」

涙目になって悲しげに鳴き始めた。
僕はスツと右手を差し出す。

「・・・？」

その手を見てギンカは訝しげに僕の顔を見る。

「お手」

「え？」

「いや、だからお手」

「う、うん？」

流されるように、ギンカは僕の右手に左手を乗せた。
それを確認し「よしよし！」っと僕はギンカの頭をワシヤワシヤと撫でる。

全く、愛い奴め！

「私は犬か！！」

「え？ 違うの？」

「違う！ 私は狼だ！！ 白狼獣人だ！」

うがぁーと両手を挙げて怒るギンカ。

「可愛いなお前」

「何が可愛いだ！！ 馬鹿にしゃがって」

「どうどう、落ち着け」

「馬鹿にしてんだろ！？」

ギンカは顔を真っ赤にしてポコポコと・・・いや、ちょっと待て。

「いて！ やめろ、待て、悪かった。ごめん、痛いって！？」

「ぐるるう！！」

この後、僕はギンカの気が済むまで殴られた。

それは、手加減したような攻撃だったにも関わらず深刻なほど僕にダメージを与えた。

007 人と魔族

「謝らないからな」

そっぽを向いまたギンカは言う。

謝らないという割には、後ろめたそう顔をしてちらちらと僕の様子を見ているところを見ると、反省はしているらしい。

こうなった原因の大半は僕にある訳なので、ギンカが気に病む事ではないと思うのだが。

「まあ、悪ふざけが過ぎた事は謝るよ」

そう言って僕が頭を下げると、ギンカは更にぼつの悪そうな顔をしたが、僕は指摘せず話を続ける。

「それで、良かったらそろそろ真面目な話をしようと思うのだけけど、いいか？」

「え？ あ、うん」

ギンカはコクコクと頷く。

その様子を見て微笑ましいくもあったが、逆に後ろめたい気持ちにもなったが、

「ギンカはここにいつまでいるつもりなんだ？」

僕は、ここまで避けていた話を切り出した。

「そ、それは・・・」

「分かっていると思うが、今回は僕が来たのは君にとってはラッキーだったとしか言いようがない。魔族と言うだけで迫害されるなんてよくある事だと聞いている。

僕は田舎者だから実際に見た事は無いけれど、ここらの城下町・・・例えばグレルリア王国なんかでは魔族を奴隷にする事が流行っているとも聞いた。

まあ、この噂が本当かどうかは知らないけど」

「・・・・・・・・」

僕の言葉をギンカは青い顔をして聞いていた。特に、グレルリア王国という言葉には露骨に反応を示した。

・・・・・・・・。。

「金は持っているのか？」

「・・・・・・・・持っていない」

「そうか」僕は懐に入れておいた袋を取出し「ほれ」それをギンカに投げた。

「うわ、ちょっと!？」

それをギンカは慌てて掴む。

「開けてみる」

「?・・・!! な、なんだよこの大金!？」

「お前の取り分だ」

「と、取り分!？」

ギンカは袋の中身と僕の顔を何度も往復するように顔を振る。

「取り分ってなんだよ!？」

「取り分は取り分だ。今回の僕に依頼された魔物退治の」

「ま、魔物なんてここにはいないだろ？」

「確かにそうだが、幸か不幸かギンカが追い払ったという二人組の男達が分かり易く化け物に出会ったと証言しているらしい。

確かに魔物はいなかったが、いたという事実が出来上がっている訳だ。これを利用しない手は無い。このまま村に帰って退治してきたと言えば、村の奴らは信じるだろう。

そうすれば僕は10000ガルが手に入る。

もしも、証拠を見せろと言われたら場合はすぐにでも君にここから出て行ってもらって無人になったこの洞窟を見せればいい。まあ、そんな度胸を持った奴がいるとは思えないが」

「・・・」

「いやか？ それならそれは返してもらおう」

そう言って僕が手を差し出すと、ギンカは迷うように手に持った袋を小さく上げ下げを繰り返す。

そうして、彼女は僕の予想とは逆に、

「返す」

そう言って、僕の手には5000ガルの入った袋を乗せた。

「・・・金額に不満があったのかい？ なら、15000の半分7500ガルでならどうだい？」

「そうじゃないんだ!」

涙を目尻に溜め、犬歯をむき出しにしてギンカは吠える。
その迫力に、僕はたじろいだ。

「トウヤは分かってないんだよ!!」

「な、何が分かってないっていうんだ？」

僕は堪らずそう尋ねる。

いや、尋ねてしまった。

「私がこんな人間ばかりの土地でお金を貰ったって何にも出来ないんだよ!!」

その答えは、人が魔族をどれほどまでに嫌悪しているかを僕に教えるにはあまりに衝撃的過ぎた。

008 嫌な予感

「ト、トウヤ殿！ ご無事でしたか！！」

デコリ氏は僕の姿を見るなりそう詰め寄ってきたが、僕の休ませて貰いたいという言葉聞いて、すぐに自分の屋敷に迎え入れてくれた。

どうやら、ギンカが付けた傷を見て僕が魔物と戦ってきたと誤解したようだ。

早く傷の手当てをと使用人を村の診療所へと走らせていた。

その時になって、僕は回復を怠っていたことを思い出したが、自分で回復する気も起きなかったので初老の医者の治療を甘んじて受け、その日は眠りについた。

・・・ほとんど眠れなかったのだけれど。

ギンカの言っていた言葉が頭から離れなかった。

「魔族に物を売ってくれる店なんてない」

「魔族とばれたら何をされるか分からない」

「人が沢山いる所になんて行けない」

そう、彼女は涙ながらに話した。

そうして、こうも言った。

「だけど、誰もがそんな事をする訳じゃないっていうのも分かってる。私を逃がしてくれたオヤジさんも、人間だったから・・・」

そう言った後、ギンカは自分の事を少しだけ話してくれたが、それを語るつもりは、今は無い。だが、一つだけ言っておかなければ

ならないだろう。

ギンカは脱獄奴隷だ。

それは、考えるまでも無く分かっていた事だった。

あんな服とも言えない布きれ一枚を羽織った奴を見て、そう思わない方がどうかしている。そして、極めつけに首に巻かれた首輪。それにこれ見よがしにつけられた錠前にはグレルリア王国の紋章、二対の鷹の絵が彫られていた。

それを、僕は見ないようにしていた。

見て見ぬ振りをして、金だけ渡して何所かに行けと、ここから出て行けと言ったのだ。

僕は最低な奴だ。

きっと、歴代の勇者達なら彼女を救ったのだろう。

だけれど、僕にはそれが出来ない。

故郷に帰りたいと泣くギンカに、連れて行ってやると言えない。

僕のような最弱の勇者にはそれを言う資格が無かった。

僕には彼女を守れない。

当然だ、弱いからだから。

僕には彼女を魔界・・・いや、ハインガル大陸まで連れて行くことは出来ない。

「はぁ」

僕は溜息を吐いて、目を覚ます。

いや、身を起こしたと言った方が正しいのか・・・別に寝ていた訳じゃないし。

僕はベットを降り、一つ伸びをしてから顔を洗おうと洗面所に向かう。

部屋出て、右に曲がり階段を下りているところで頭二つほど小さな赤茶色の髪の少女がいた。

「おはようございます。トウヤ様」

「おはようございます。ええっと、デコリさんの・・・」

「はい、娘です」

僕の身長が高いという事もあるだろうが、彼女身長はそこから差し引いてもかなり小さいだろう。

デコリさんと奥さんの年齢を考えると、この彼女の年齢は僕と同じかそれ以上なはずだが、とてもそうには見えず、14、5歳の見た目にしか見えなかった。

彼女は白いワンピースのスカートの端を両手でつまみ、軽く持ち上げるようにして、

「昨晚は自己紹介もできず申し訳ありませんでした。私はケイト・ヒレダスと申します」

そう、上品に挨拶をした。

僕はそれに応え、

「僕はトウヤ、苗字など持たざる下級な旅人です」

そう、無骨に返した。

「そんな事はありません。トウヤ様は立派なお方だと思います」

「お褒めに授かり光栄ですが、僕は職も持たざる旅人。どこも立派なところなどありません」

「そう言うところが立派だと思います」

「？」

僕は首を捻り、「どういう事でしょうか？」と尋ねると、ケイトさんはニッコリとその容姿に似合う子供の様な無邪気な笑みを浮か

べる。

なんというか、外見と中身がかみ合っていないように感じる。

「その様な振る舞いが立派だと申しております。

前にも一度冒険者を名乗る者達がこの村を訪れた事がありました
が、あの礼儀のなっておらず『俺達のおかげでお前らは平和に暮ら
せているんだ』というものの言いは、正直不快でした。

それに比べて、トウヤ様の振る舞いは何処か気品すら感じられま
す。どこかの貴族の者だと言われても疑問に思いません」

「・・・それは光栄です」

僕はケイトさんの目線から逃れるように顔を逸らした。

「ふふふ、照れてらっしゃるのね」

そう言ってケイトさんは悪戯っぽく笑う。

僕は、そういう事にした。

そう、僕は照れているのだ。

「からかうのはやめてください」

「からかってなんかいません。本心で言っているんです。

ふふふ、立ち話もなんですから、リビングの方まで来てください。

朝食の用意が来ています」

「ええ、それでは顔を洗ってから向かいます」

僕はそう言って、その場を後にした。

洗面所で顔を洗ってリビングに行くと、デコリさん、ケイトさん、

それにデコリさんの奥さんが席に着いていた。

どうやら僕を待っていたようだ。

僕は「遅れて申し訳ない」と空いていたケイトさんの隣の席に着いた。

「それでは、頂くとしよう」

デコリさんが言うのと、それはまるで決められた儀式のように三人は「頂きます」と同じタイミングで言う。

少々居心地の悪さを感じながらも、僕は遅れて「頂きます」とつぶやいた。

食事中はケイトさんが僕に盛んに話題を振ってきた。それに無難に返していたのだが、後半『どこから来たのか』などのあまり触れられたくない話題ばかりだったので「故郷の事はあまり触れないでください」と、苦し紛れに言うのと、

「ご、ごめんなさい」

そう言っ、僕に送られる目に慈愛の色が付いた。

何か勘違いしたようだが、正す必要も意味も感じなかったのでそのままにしておいた。

食事が終わり、メイドさんが食器を片付け終わった後を見計らったように、

「ミルダ、ケイト、席を外してくれないか？」

と、切り出した。

「はい、分かりました。それじゃあ、ケイト、行きましょう」

「え、で、でも・・・」

「行きましょう」

渋るケイトさんを有無を言わせず連れて行く奥さん。いや、ミルダさんか、まさかこういった形で名前を知ることになるとは・・・彼女は僕をまるでいない者の様に扱っていた節がある。

一度目があったが、浮かべられた表情とは裏腹にその眼は僕を見下すような色をしていた。

どうやら、ミルダさんはデコリさんが言うところの悪癖を隠すつもりはあっても、直すつもりは無いのだろう。そう言う印象を受けた。

二人が部屋の扉を閉めるのを確認してから、デコリさんは口を開いた。

「ええっと、トウヤ殿」

言いにくそうに口籠るデコリさんを見て、僕は口を開く。

「魔物どうなったか・・・ですね？」

「え、ええ」

デコリさんは一つ頷き、緊張した顔で僕の返答を待つ。

僕は目を閉じ、一度気が付かれないように大きく呼吸をした。

「申し訳ありませんが、もう少し時間をくださいませんか？」

「じ、時間ですか？」

「はい。どうも気になる事があるんです」

「気になる事、ですか？ それは一体どのような・・・」

デコリさんはそう言って、表情を顰める。

要らぬ不安を煽りたくはない。

だけれども、僕はどうもこの話をここで終わらせて良いのかという疑問があった。

「洞窟の魔物については、もう問題はありません」

「ほ、本当ですか!？」

「ええ、昨日のうちに片を付けました」

「それは、良かった」

デコリさんは表情を緩め、ほっとするように椅子にもたれ掛った。嘘、という事ではない。

お金云々は保留のままだが、ギンカがあのだ窟から出ていくという事はもはや決定事項だ。

脱獄奴隷など、人間どころか家畜以下の扱いを受ける存在。人に見つかるというリスクが増えた以上、ここにいる訳にはいかない。それは、ギンカも分かっている。

だから、この時間の先延ばしは彼女がここから無事出られるように、そう言う意味もある。

だけれど。

「なんというか、漠然とした不安というか、嫌な予感がするんです。ですから、もう少し調べさせてもらいたいと思ひまして」

これもまた事実だった。

デコリさんはそれを聞いて不安げに表情を歪めたのを見て、「勘違いだとは思いますが」と付け足した。

表情こそ緩めたが、デコリさんは油断ない真剣な顔つきで僕を見る。

「そう言うことでしたら、私も協力できることは協力します」

そう言って、協力の約束をしてくれた。

札を言って立ち上がり、部屋を後にしようとしたところで、一つデコリさんに対する疑問を口にした。

「僕の事をそんなに無条件に信頼してもいいのですか？」

幾分の沈黙が流れ、僕が「忘れてください」と言おうとした時、デコリさんはこう言った。

「あなたに縋るしか我々には道が無いだけです」

そう言って笑うデコリさんの眼を、僕は直視できなかった。

009 再び洞窟へ

デコリさんとの話が終わってからある場所に寄り、その後食料と女性物の服を一式買って洞窟へと向かった。

二度目という事と昨日の様に警戒する必要がある為、半分ほどの時間で難なくギンカが生活している洞窟の入り口まで辿り着く事が出来たが、僕はそこで尻込みしていた。

どんな顔をして会えばいいのだろうか？

僕は一人頭を抱える。

乙女か僕は、とも思ったが。僕にとっては切実な問題だった。というか、昨日の話を聞いて何食わぬ顔で会えるか！ という話である。乙女関係ないし、誰だって頭抱えるわ。

一応「明日も来る」と入っておいたが、もしかしたら昨日の内にここを出て行ってしまったという可能性もある。

だったら行く必要ないんじゃない？ と、臆病な僕は言う。

馬鹿野郎！ まだいるに決まってるだろ！ ちゃんと責任とれよ！ と、責任感の強い僕が言う。

尻尾もふもふしたい・・・と、煩惱全開の僕が言う。

・・・耳だって触ってみたい！ と、僕は思った。

「よっしゃあ！ いくぜ！」

僕は、洞窟へと突撃した。

中に入ると、ギンカが隅の方で丸くなってガタガタと震えていた。え、何この状況？

「お、おい、どうしたんだよ？」

僕が堪らずそう問いかけると、ギンカはビクツを反応して顔を上げる。

その顔は、泣き腫らしたように腫れ上がった目をしていた。

「と、トウヤ・・・？」

「ああ、そうだよ。トウヤだよ。お前どうしたんだ？ 一体何があった？」

僕はギンカに近寄り、屈んで目線を合わせてもう一度問う。
ギンカはしばらく僕を見つめた後に「な、なんでもないよ」と僕から視線を逸らした。

僕には、とても何にもなかったようには見えなかった。

「・・・そうだ。腹減ったろ？」

だけれど、僕にはこんな事しか言えなかった。
僕には、どうしていいか分からなかったのだ。

「村で食い物買ってきたんだ、ギンカは果物が好きなんだっけ？
ほら、リンゴなんてどうだ？」

僕はそう言って、袋からできるだけ色好きの良く大きなリンゴを取り出して、彼女に差し出した。

我ながら美味そうなリンゴを選んだと自負できる。正直、僕自身で食べたいとさえ思う逸品である。

さあ、それでも食べて落ち着きたまえ！

作戦名『困った時の食べ物』である。

ギンカはそのリングを見て、泣き出した。
僕は本当にどうしていいか分からなくなった。

「な、泣くほどリングが嫌いだったのか！？ ごめんな、他にもいろいろあるから――」

どうすれば、どうすれば、と女の子の涙に耐性の無い僕は見つとも無く狼狽る。

「ち、ちぎやう、ちがうの、そうじゃないの！！」
「おおう！？」

急な大きな声に驚いて、僕はギンカを見据える。

「ごめんなさい、ごめ、んなさい・・・う、うあああああああ
ああああああん」

耐え兼ねた様に、彼女は泣き出した。
ボロボロとボロボロと大粒の涙を流して。

僕はギンカの頭を撫でながら「大丈夫、大丈夫だから」と言う事しか出来なかった。

訳も分からぬまま、僕はギンカを撫で続けた。

010 どうか、私を連れて行ってください

「きのう、トウヤが帰った後、なんであんなことを言っちゃたんだろうって、ずっと後悔してた・・・自分から、言っておいて、勝手に後悔した。

も、もしかしたら、トウヤが私の事、みんなに言うんじゃないかって、私の事、売るんじゃないかって・・・

だけど、そんなこと無い。トウヤはそんなことする人じゃないって思おうとした。『明日また来る』って言葉を信じて待っていようと思おうとした。

だけど、一度思ったら消えなかった。

私は騙されているんじゃないかって、トウヤは私を騙して、お金を手に入れようとしてるんじゃないかって・・・そんな考えが消えなかった。

脱獄奴隷を見つけて届けた者には沢山の謝礼金が出るって、聞いたことがあったから、もしかしたらトウヤもそれが目当てなんじゃないかって、考えたら消えなくなった。

だから、逃げようと思った。

この洞窟から出て、別の場所に行こうと思った。

だけど、けど・・・私には、どこに行けばいいのか、わからなかった。

ここを出るのが怖かった。

ずっと、出て行こうか、待っていいようか、考えてた。

トウヤの事を疑ったり、信じたり、繰り返した。

そうしたら、悲しくなった。

トウヤの事を信じようとしている自分と、疑って、貶して、死んでしまえと思っている自分がいるのが悲しかった。

どんなに信じようと思っても、そんな自分がいるのが悲しかった。

か、勝手だよな？ 幻滅したよね？ 嫌いになったよね？ トウヤはそんな事考えないで、わ、私がお腹すいてるんじゃないかって食べ物まで用意してたのに、私は、トウヤが私を利用しようとしてるんじゃないかってずっと考えたんだよ？

トウヤに助けてほしいなんて自分勝手に思いながら、死ねとも思ってたんだよ？

勝手にそんなこと思って、そんな自分が嫌で、だけど騙されてるんじゃないかって考えも消えないで、それで、それで・・・」

「もう、良いから。大丈夫、ギンカの嫌いになんてなってないから、泣くな」

「う、ううううう」

僕は、子供をあやす様にギンカの背中を優しく叩く。

弱り切って、今にも崩れ落ちそうな少女を優しく、壊れ物を扱うように包む様に抱きしめる。

どれくらいそうしていただろうか。

ギンカが「ありがとう、もう大丈夫」と言って僕から離れようとジタバタするまで続けた。

泣きやんだギンカにとりあえず「食べ」とリングを差し出す。

恐る恐る、それを受け取り一口食べる。その後は一心不乱にリングに齧りついていった。

腹が減っていたのだろう。数分後には僕が持って来たリングをすべて平らげてしまった。

それでも物足りないのか、自分の手を念入りに舐めているのが扇情的でエロかった。

僕がそれをジーっと眺めていると、その視線に気づいたのか恥ず

かしそうにしながら「は、はしたないよね」と止めてしまった。
寧ろもつとやって欲しかったとは思っても言えない。
さて、冗談はこれくらいにして、そろそろ本題に入るか。

「ギンカ一つ聞きたいことがあるんだが」
「なに？」

泣いた事が恥ずかしいのか、幾分腫れの引いた目をしながらもぶつきら棒に言う。

どうやら、昨日の調子に戻ってきたようだ。

「一週間前くらい、ええと、正確には九日前の事なんだが、ここにだれか来なかったか？」

「九日前……」

そう言って、ギンカは視線を右に左にキョロキョロと動かして、

「九日前かは分からないけど、一回だけ何かが罨にかかった事があったのは確かだよ。見に行ったら誰もいなかったけど」

「……そうか。分かったありがとう」

「？」

ギンカは腑に落ちないようにしながらも、何も聞かず、ただ黙っていた。

「ああ、そうだギンカ」
「なに？」

僕は、用意した服と食べ物が入った袋、そして、有り金の全てを差し出した。

まあ、有り金と言っても5000ガルぐらいしかないが。

「受け取ってくれ」

「こ、これトウヤの荷物じゃないか、受け取れないよ」

「これは僕の持ち物の一部であって、全部じゃない。金だってまだあるし、この後10000ガルも受け取る予定だ」

「お、お金なんて貰っても使えないし・・・」

「それなら安心しろ、その為にその服を買ってきた」

そう言って、僕は用意した服を広げた。

「これに着替えてみてくれ」

「え？ う、うん」

渡してすぐ、ギンカはこの場で着替え始めたので、僕は慌てて背を向けた。

しゅるしゅると後ろから着替える音がして、気が気ではなかったが、今さらこの場から出ていくことも叶わず（出口はギンカ側にある）僕は着替えが終わるのを待つしかなかった。

「き、着替えたよ」

その声に導かれて、僕は振り返った。

そこには、犬耳の生えたメイドさんがいた。

「キターーーー！！」

「な、なに？」

僕の興奮ぶりにギンカは引いていた。

「あ、いや、すまん」

あまりの似合いっぷりに思わず我を忘れて叫んでしまった。
恐るべし、犬耳メイド……だけど、それじゃあ駄目だ。

「ちょっと、屈んでくれるか」

「え？　こ、こう」

素直に従ってくれるギンカ。

僕はそんなギンカの耳を掴んだ。

「ひゃん！　な、なにすん——」

「まだ、動くな」

「え？　う、うん」

僕の真顔に怖気づいたのか、ギンカは僕に耳を委ねる。

時折ギンカは「んっ、ひゃ」とか「んんっ」とか艶っぽい声を出した。

なんか変な気分になりそうだったので、そのふさふさとした耳の感触を味わうのをやめ、僕は耳を前に折るようにしながらメイドさんが被るような頭巾（名前は知らない）を被せた。

そして最後に、首輪と錠前を隠す様に大きめの白いリボンをつけてやった。

「これでよし」

「？」

ペタペタと自分の頭に被せられた物を触りながら、しきりにギンカは首を傾げる。

僕は用意しておいた鏡を取出し「ほれ」とギンカを映す。

「これで、誰が見ても人間だ」

「あ・・・」

鏡に映った自分を見て、ギンカは目を見開いた。

自分の姿に驚いているのだろう。

その姿は凄まじいくらいに似合っていた。

「これで、人里に行っても大丈夫だろう？」

確認するように僕は問う。

そうして、最後に言ってやる。

「これで、一人で生きて行けるだろう？」

その言葉を聞いたギンカの顔はまるで、親に捨てられた子供の様に
すがるようなものだった。

「と、トウヤ、ず、ずっとお願いしようと思ったことがあるんだ」
「なんだ？」

ギンカは僕の声を聴いて、怯む様に、怯える様に、身を縮める。
それはそうだろう。

僕の声も僕の表情も、それは酷く冷めたものだろうから。

「こ、こういう服が好きっていうなら、着てもいいし、わ、私これ
でも料理とかも、ちよつとしたものなら作れるんだ」

「それで？」

「そ、その、あ、あの、そ、それに、私、力もある！ 戦う事だっ

てできると思うんだ」

「だから？」

「と、トウヤが望むなら、か、身体だって、さ、さしだしてもいい。手を出される前ににげたから、よ、よく分かんないけど、が、がんばるから!!」

「だからどうした？」

「・・・っ」

目尻に涙を溜め、泣きそうになりながら、ギンカは言った。

「どうか、私を連れて行ってください」

そう言って、ギンカは頭を下げた。

媚びるように。

卑下するように。

「もう、ひとり、いやだよお」

僕は立ち上がって、言う。

「それは出来ない」

そうして、僕はギンカの横を通り過ぎようとした。

「ま、まってえ」

ギンカはズボンの裾を掴んだ。

僕は、そんな彼女を見下ろし、

「悪いけど、僕は魔族なんかと旅をするつもりは無い」

そう言ってその手を振り払った。

「今日にでも、この洞窟から出て行け。分かったな」

僕は振り返らずに、洞窟を出た。

外に出て、僕は天を仰ぐ。

雲一つない青空は、まるで僕の心の中の鏡写しの様で嫌になった。だけれど、仕方がないだろう。

僕はギンカを連れて行けない。

連れて行ってやれる訳がない。

下手な希望を与えるのは、絶望を与えるよりも残酷なのだから。だってそうだろう？

「僕は、明日死ぬんだから」

011 おとぎ話の怪物

月無き夜、家を出てはいけない。

その夜は彼の物、家を出てはいけない。

月無き夜、決して明かりを絶やしてはいけない。

その夜は彼の物、決して明かりを絶やしてはいけない。

彼には姿などなく、実体も無い。

それは、まるで闇が蠢いているのよう。

月無き夜、家を出てはいけない。

その夜は彼の物、家を出てはいけない。

月無き夜、決して明かりを絶やしてはいけない。

その夜は彼の物、決して明かりを絶やしてはいけない。

彼はの夢を食い、悪夢を見せる。

決して目覚める事のない、長き悪夢を見せる。

もしも、蠢く闇を見たならば、逃げなさい。

朝まで逃げれば彼は消える。

朝には蠢く夜の王は闇に帰るのだから。

『

それは、誰もが知っているようなおとぎ話。

夜遊びする子供に言い聞かせる夜の王の話。

夜中に遊んでいると、夜の王様に夢を食べられちゃうわよ。と、

母親達が子供を脅すのに利用されるおとぎ話。

僕もこの話を聞いて、夜が怖くなったものだ。

蠢く夜の王に夢が食われてしまうと、怖くなったものだ。

「ははっ、まさか、そのおとぎ話の怪物と戦う事になるとは夢にも思っただけだったな、ほんとに」

僕は、たった一人。村の中心に位置する井戸に腰かけて、呟いた。町の中心で、たった一人。蠱く夜の王を待っていた。ナイトメア

最初に、デコリさんの話を聞いた時点で予感があった。

悪夢に魘される兄弟の話を聞いた時点で予測は出来た。

だけれど、それは考え過ぎだと思った。

まさか、おとぎ話の怪物がこんなところにいる訳がないだろうと、勝手に結論付けたからだ。今にして思えば、現実逃避以外の何物でもなかった。しかし、誰も伝説級の魔物と、いや、文字道理伝説の魔物と遭遇する羽目になる事など誰が考えるだろうか。

少なくとも、僕は考えないようにした。

魔物の中で唯一悪夢を見せるといふ能力を持つ魔物の存在を僕は忘却しようとした。

きっと、恐ろしい魔物に出会ってその恐怖から悪夢を見るのだと、自分に言い聞かせ、被害者の家には行かなかった。

だけれど、魔物がいるという洞窟に居たのは美しい魔族だった。

可愛らしく、臆病で、素直な、一人の獣人だった。

そうして、僕は自分の予感がどうやら間違っていなかったようだと、知った。

二回目にギンカのところに向かう前、逃げ帰ってきた兄弟の家にいき、その二人が意識を取り戻さず眠り魘され続ける弟と逃げ帰ってきた兄だと知って予感は確信へと変わった。

兄の話を聞けば、洞窟で不気味な音を聞いて逃げ帰っている途中に弟と逸れたのだと言う。そうして、村民総出で探して見つけた時には弟は覚めぬ眠りにについているのだと言う。

もはや、確信は事実へと成った。

その後すぐ洞窟に向かい、帰ってから僕がした事は全ての人間を

この村から逃がす事だった。

デコリさんは耳を疑い、そんなおとぎ話の魔物の存在を中々信じてはくれなかったが、僕の正体が勇者ツキシマである事を語り、勇者のあかしである右肩の龍を模ったような痣を見せると、すぐに避難を促してくれた。

まあ、避難したところで安全な場所など無いのだが、少なくとも村や町をいくつも滅ぼしてきた魔物がいる森から少しでも離れるべきだろう。

蠢く夜の王は闇に生きる魔物。

月の光すらも嫌い、新月の夜しか行動を起こさない。

おとぎ話の通りなら、新月である今日を逃げ切る事が出来れば彼は闇に帰るはずなのだから。

「あくまで、はず。でしかないんだけどね」

新月でもないのに襲われたという兄弟がいるのだから、闇に帰ると言うのが、暗闇に潜むという意味である可能性は高いが、もしかしたら、本当に闇に帰るのかもしれない。五十年もの間存在すら確認されていない魔物だから、もしかしたら後者で正しいのかも知れないけれど、その闇に帰るというのが何を意味し、そして、いつその闇に帰るかも分からない。

今日なのか、明日なのか、一週間後なのか、一か月後なのか、一年後なのか、それは誰にも分からない。

「だから、僕が今日戦う意味は無いかもしれない」

伝説の魔物。

誰にも打倒されず、数多の勇者たちを殺してきた厄災とも言われる怪物。

僕に勝ち目など殆どないだろう。

殆どどころか、1%も無いかもしれない。
0・1%あるかどうか分からない。
だけだ。

「時間稼ぎくらいは、しなくちやな」

そう言って、僕は愛刀を鞘から抜剣した。
せめて、少しでも村の人々が、ギンカが逃げる時間を稼ぐ。
僕にできる事はそれくらいだ。

「はっ！ こいよ 蠱^{ナイトメア}く夜の王 勇者月島^{つきしまどうや}刀祢^{たね}がお相手してやる！」

そうして、僕は真名を名乗り蠱^{ナイトメア}く夜の王と対峙する。

その姿は、おとぎ話の通り、まるで闇が蠢いているかのようだった。

012 蠢く夜の王《ナイトメア》 改稿版（前書き）

どうしても納得がいかなかったので一部書き換えさせてもらいました。

012 蠢く夜の王《ナイトメア》 改稿版

「はっ！」

僕は大きく後ろに跳躍し、一度大きく距離を取ってから詠唱を行う。

「聖なる光よ、我が右手に集い、闇を切り裂く刃と成れ。 シャインエッジ！」

右手に作り出された光の刃を、僕は蠢く夜の王に向かって放つ。放たれたそれは、蠢く夜の王に当たり、その体を切り裂き、その体の一部を分断する。分断されたそれはびしゃりと地面に液状に広がる、また本体の方にへとにじり寄る様に戻り、また一つにへと形を形成する。

限が無い。だけれど、攻撃が通らない訳でも無い。

無敵の怪物ではなかったと言うだけでも、救いではあった。

小一時間戦闘してみて、物理的攻撃は当然の様に通らなかったが、攻撃魔法、特に光魔法は目に見えて効力を発揮している。

このまま魔法攻撃を続けられれば、勝ち目はあるだろう。そう、勝ち目はあるのだ。

「このまま続けられればの・・・話だけれどね」

確かに、攻撃は効く。その証拠に蠢く夜の王の姿は戦闘開始時点より、幾分小さくなっている。こういった、実体のないタイプの魔物は実体のあるタイプの魔物たちとは違い、目に見えて血が出たり損傷したりはしないが、その造形に変化が現れる。その中でも一番一般的な造形の変化は体の縮小で、蠢く夜の王もその例に漏れてい

ないようだ。

「ナイトメアだけれど、ナイトメア蠢く夜の王はあまりにも大きすぎた。

蠢く夜の王の造形は分かり易く言うなら『真っ黒なスライム』といった具合。だけれどその様は・・・小さな山一つ動いているかの様だった。

これが、少しばかり小さくなったところで何が違うと言うのか？こんなものを相手して、MPが持つ訳がない。

実際問題、今の僕の手持ちのMP回復のアイテムは、マジックボトル一本しか残されてはいなかった。回復アイテムだって、もう底を尽きていた。

それに悪夢を見せる能力。その攻撃の方法が分からない以上、無暗に接近できず遠距離からの魔法攻撃しか出来ない為、威力も弱いものばかりで戦うしかない。

救いだっただのは、動きの鈍さと攻撃の種類の少なさ。自分の体を切り飛ばしたような黒い塊を飛ばしたり、鞭のように伸ばしたりすることしかなかった事だが、それでも僕の体力はジリジリと削られた。

もう、どう考えても勝ち目など無かった。

「全く、締まらねえな、僕の人生は」

僕は、刀を地面に突き刺し立ててから、最後の一本のマジックボトルを取出す。それを煽る様にして飲んだ

もちろん、マジックボトルは酒ではなくMPを回復させる薬だ。

だけれど、今は酒でも煽りたい気分だった。

「魔界最強の騎士とか、凶暴な魔物なんかに殺されるなんてなら、勇者の最後に相応しいだろうけど、こんなどうしようもない化物にやられて終わるなんて、これじゃあ犬死じゃないか」

僕はマジックボトルを一気に飲み干し、地面に投げる。
カラカラとマジックボトルの空き瓶が転がって行った。

「全く、なんだったんだろうな。」

勇者として育てられて、仲間を連れて旅に出て、戦い続けて、何度も死にそうになったのに、まるで強くなれなかった。

なんだよ、勇者が足手まといって？ 力は僧侶のミルラと大して変わらないし、身の守りなんて魔法使いのマリーにも劣った、素早さだって、戦士のアーク以下、HPもMPもパツとしない。これの何処が勇者だって言うんだよ」

新月だからか、夜空には数えんばかりの星が輝いていた。

そんな些細な事まで忌々しく感じられた。

僕は、あまりにも器の小さな男だった。

「挙句の果てが『旅を辞めよう』だもんな。」

そうだよな、俺みたいな出来損ないの勇者なんかといたら死んじまうもんな、旅なんて続けられないよな。

だけどさ、俺は勇者なんだよ。

俺が死なないと、次の救い手が生れないんだよ。

使えないなら早いとこ死なないと、世界に迷惑がかかるんだよ。

アーク。

お前は優しいから、黙って消えずに僕を説得しようとしてくれたが、駄目なんだよ、僕は死なないと。

足手まといの勇者なんて、世界は望んでいないんだよ」

夜空の星々を裂く様に、一本の黒い線が入る。

それが、僕に目掛けて落ちてくる。

だけれど、僕は動かない。

「全く、嫌な人生だったよ」

そうして、僕は目を閉じた。

「トウヤアー！！ にげてええええええええ！！」

「ぐはあ！？」

僕の体は、突然の衝撃を受けて、右に吹き飛ぶ。

二度、三度と地面に体を打ち付け、ゴロゴロと転がり止まる。
なんだ？ 何が起こった？

僕は身を起こして、それを見た。

「ううう、あううう・・・」

その足に、黒いものに巻きつけられたギンカがそこに居た。

何がどうあって、こうなったかは分からない。

だけれど、ギンカが僕を助けてくれたことだけは確かだった。

昨日の内に、ここから離れたんじゃないのか？ なんでここ

にいる？　なんで僕のような奴を助けた？　いくつもの疑問が僕の脳裏を過る。

いや、そんな事は、どうでもいい。

はやく、助けなければ。

僕は、彼女に駆け寄ろうと足を踏み出す。

だけれど、

「に、にげて、はやくにげてえ！」

そのギンカの口から出たものは、拒絶の言葉だった。

死を覚悟し、死を受け入れようとした僕に逃げろと、恐怖に震えた声で言う。

「うっ、うううううう」

恐怖に引き攣った顔からは、大粒の涙がボタボタと落ちる。

ギンカの体は、ズルズルと後ろにへと、あの化け物にへと引き摺られていく。

それに近づいてくるように、本体の方もまるで押し寄せる津波の様に、地響きを上げながら這い寄ってくる。

それに抗おうと、ギンカは爪を地面にたてる。

だけれど、止まらない。

ズルズル、ズルズルと、ギンカの体は引き摺られていく。

それでも、

『逃げて』

泣きながら、顔を涙でぐしゃぐしゃにしながら、ギンカは言う。
僕には、それが耐えきれなかった。

「なんで、なんで僕を助けた！ 僕なんて生きる価値のない人間をなんで助けた！！ 僕はもう死にたかったのに、早く終わらせてしまいたかったのに・・・なんで、なんでだよ！！！」

気が付いたら、僕は叫んでいた。

僕は死んでしまいたかった。

せめて、誰かを守って死んでしまいたかった。

なのに、なんで守ろうと思った奴に僕は救われている。

それは、あまりにも酷いじゃないか。

僕は、最後の最後まで己の無力さに打ちひしがれなければならないのか？

死の寸前まで、僕は、己の弱さを悔いなければならないのか？

そんな思いが、口から出る。

ギンカを責める様に、呪詛を吐く。

僕を助けようと、そう思ってくれた少女に浴びせる。

「お前は、僕の邪魔をしただけだ！！」

ああ、僕は何処まで堕ちればいいのか。

もう、死んでしまいたい。

「・・・ごめん、なさい」

彼女は泣いていた。

「ごめんなさい」

ズルズルとその体を引きずられて、たてた爪に力を籠めず、力無く泣いていた。

この世に絶望したように、その眼を濁らせて。それはまるで、僕の眼の様だった。

僕は、ギンカにあんな眼をさせたくて喚いたのか？

僕のように、死にたいと思わせたかったのか？

だったら喜べ、成功した。

ギンカはもう死んだような眼をしている。

まるで、僕のようにこの世に絶望しているぞ。

喜べ。

喜べ。

喜べよ、僕。

喜んでみろよ！

「ふうざけるなああああああああああああああ！……！」

僕は、全身全霊を込めて己の頬を殴った。
そして、吼える。

[illegible]

僕は駆ける。

少しでも早く、
脚を動かす。

僕は一体何がしたかったのだろう。

死にたい死にたいと喚いて、他人もそれに巻き込まれたのか？

そうだとしたら、僕は救いようのない馬鹿だ。

この世の不幸を背負った氣にでもなっていたのか？

そうだとしたら、僕はどれだけ思い上がっていたんだ。

僕はただの勇者だ。

勇者なんて大それた名前の付いたただの人間だ。

そんな事が、できる訳も無い。

僕は、自分が可哀想な奴だと思ったただけ。

不幸を背負って見たかっただけ。

そんな馬鹿だ。

「この世に住まう光の聖靈達よ我が言靈に答えたまえ、我が右手には聖なる木槌を、我が左手には真実の剣を与えたまえ——」

己の全ての魔力を、その一つ一つの言霊に注ぎ込む。
己の全ての生命力を、その一つ一つの言霊に捧げる。
枯渇する魔力に、脳が悲鳴を上げる。

失われていく生命力に、肉体は破壊を告げる。

「聖なる木槌は罪深き者に鉄槌を下ろし、断罪する真実の剣は罪深き者を断罪す——」

脳は、沸騰するように熱を持ち、その中身をかき回されたような痛みと吐き気を催す。

肉体は、ブチブチと筋肉の繊維が切れる音を鳴らし、体中には亀裂のような切り傷が生れ、血が噴き出す。

それでも、僕は唱え続ける。

僕は、唱えなければならぬ。

「神の裁きは闇を切り裂く大いなる閃光と成りて、天より降り注げ

——」

途切れようとする意識を、無理やり止め、唱え続ける。

倒れ行く体を、無理やり起こし、走り続ける。

死んでも構わない。

だけれど、死にたいとは思わない。

あいつに、ギンカに、僕は謝りたかった。
ギンカに、心の底から謝りたかった。

「神の怒りをその身に受けよ——」

だから僕は、あいつを救おう。
たとえ、死んだとしても。
救ってみせる。

「ホーリージャックメントオ——!!」

ここより西の王国、グレルリア王国ではこんな目撃証言が集まった。

闇夜を切り裂く光の洪水。

神がこの世に舞い降りた。

この二つは、後々語り草として、広く世に知ら締められる事となる。

そうして、この日から歴史上最後にして最弱の勇者の伝説は、始まった。

012 蠢く夜の王《ナイトメア》 改稿版（後書き）

今回使用した魔法

シャインエッジ 光魔法 MP5

生成した光の刃を放つ攻撃呪文。

使用MP、威力共に優秀で遠、中、近距離にも対応できる。
トウヤのお気に入り。

ホーリージャツチメント 極大光魔法 MP80

天空より、神の裁きを振り下ろす。

勇者のみが扱える極大光魔法。

威力、範囲に優れているが、その使用MPの多さで使い勝手は悪い
がトウヤが扱える魔法の中で一番の威力を有する。

今回使用した特殊技能

代償術式 応用魔法

代償を払うことにより、特殊効果の付与、威力の強化、詠唱の破棄
を可能にすることができる術式。

本文中では記載されていないが、今回トウヤはホーリージャツチメ
ントに代償術式を組み込んでおり、全魔力と全生命力を代償にし威
力の強化を行っている。

一般的に多用される詠唱の破棄についての説明。

使用魔力を増やすことで行われる事の多い詠唱の破棄だが、使用者
の魔法の実力によって威力、射程距離、命中精度が下がる。

トウヤは魔法の使用に長けており、また一人旅の関係上詠唱の破棄
を多用していたため、代償術式は得意としている。

術式についての補足説明。

説明をしていなかったのも、この場で簡単に説明したいと思います。術式とは魔法に組み込み効果を付けるもの指す言葉です。

これは詠唱などとは違い、言葉にするようなものではなく頭の中でイメージして、魔法に効果を付属させます。

詠唱の破棄で説明すると、詠唱を言葉としてとして口に出さず、頭の中で詠唱をしている自分をイメージし魔法を発動させる、という感じです。

これは上記で説明している詠唱の破棄をした場合の威力、射程距離、命中精度が下がる事と関係しており、つまり、イメージが上手いかないと威力、射程距離、命中精度が下がるという結果に繋がります。

後書きの後書き

もしも、前のものそして今回のものも読んでくださった方がいましたら、本当にありがとうございます、そして、申し訳ありません。後々に読み返してみても、これはないと僕の中で結論がついてしまっていることになってしまいました。

前の方が良かった、今の方がいい、どちらも糞、などいろいろ思うところはあるでしょうが今後ともよろしく願います

013 目覚め

目覚めると、白髪交じりのおっさんが目の前にいた。

「うお!？」

「おや? 起きたようだね」

おっさんはそう言ってなんでもないように僕の上着を脱がせ始める……って、ちょっと待て、なんだこの状況!?

僕は何とかこの状況から逃れようとする。が、身体が、動かない……え? これはもしかして、詰みって奴ですか? 僕の初めてはこの白髪のおっさんに奪われてしまうのですか? ……そんなの嫌すぎるわ!

「ぬおおおお!」

動け、僕の身体。この絶望的かつ危機的状況から何とか脱出するのだ!

起こそうと、全身に力を込める。

が……、まるで鉛の様に重い体は思うように動かない。

え? なんで!?

まさか、拘束魔法か!?

「はっはっはっ、起きて早々元気がよくて何よりだ」

それを嘲笑うかのように、おっさんは柔らかな表情を浮かべ、僕の上着を慣れた様子ではだけさせる。そうして、下着を捲られる。

まじでたすけてください。

「うふぁ！」

僕は、思わず声を上げる。

冷たっ！！

「うむ、脈拍は正常だね・・・傷の方もだいぶ良くなっているし、もう大丈夫だろう」

そう言って、おっさんは三度場所を変えながら何かを僕に当て、それを放した。

この時になって、それが聴診器である事。そして、このおっさんが一度目に洞窟から帰った僕を治療してくれた医者である事に気が付いた。

確か、名前は・・・デュークさんだったはず。

「あの、ここは・・・？」

「ん？ ああ、ここは私の診療所だよ。トウヤさん・・・いや、勇者様の方がいいのかな？」

「・・・トウヤさんの方で構いませんよ」

「そうですか、それではトウヤさん。ええと、ここにいる理由の方は覚えていますか？」

「理由・・・？」

そう言われ、僕は思い出そうと頭を捻る。

僕は確か、そう、蠢く夜ナイトメアの王と戦っていたはずだ、そして――

「ギ、ギンカは！？」

僕は唐突に思い出した。

そうだ、ギンカは、ギンカは無事なのか!?

思うように動かない体に瞬間的に力を籠め、上半身を起こすが、

「うっ、ぐはあ!!」

まるで体中を引きちぎられるような激痛に襲われる。

なっ、なんだこれは!?

う、動けねえ。

「落ち着きなさい。まだ無理はいかん」

痛みに呻く僕を、デュークさんは支えてくれたが、僕はギンカは無事かどうかという事で頭が一杯で、感謝の弁を告げる余裕はなかった。

そんな僕を見て、デュークさんはもう一度「落ち着きなさい」と、言って僕から視線を逸らした。

「それにほれ、ギンカさんならそこにおるだろう?」

「え?」

言われて、僕はおっさんの見ている方、僕の腹部へ視線をやる。

そこには、僕の寝ているベットに上半身を預ける様に眠るギンカの姿があった。

「よ、良かった・・・」

僕は安堵し、左手を伸ばす。

その腕に無数の切り傷が刻まれていた事に、僕は少々驚いたが、あの時使った代償術式を考えればそれは当然の結果と言えた。

腕は思うように動かなかったが、それでもできる限り優しくその頭を撫でてやる。

むず痒そうにピクピクと耳が反応していたが、撫で続けていると頭を撫でやすいように

僕の方に無意識でか寄せてきた。

僕がそれを見て笑っていると、「コホン」と咳ばらいが聞こえ、ハッとして僕は顔を上げる。

「す、すいません」

「いえ、謝る事は無いですよ。ただ、声をかけるタイミングが無かっただけです」

苦笑いを浮かべてデュークさんは頭を掻く。

僕は恥ずかしくなったが、手だけはギンカの上に乗せたままにしておいた。

そんな僕たちを見ながら、デュークさんは口を開いた。

「なんといいいますか、私は魔族というものを誤解していましたよ。凶暴で、野蛮、人を食う化け物そんな風に思っていましたけど……」

「……それは――」

そう言う風に、世間が風潮しているからだ。

僕は、その言葉を寸前のところで飲み込んだ。

「ですが、それは間違いだったのですね。少なくともギンカさんはそうではないそう思いました」

「……?」

ここで、僕は一つの違和感を覚え、もう一度ギンカを見た。

恰好は白のワンピース。髪は透き通るような銀髪。

その頭には獣の耳、お尻には獣の尻尾が生えている。

何もおかしくは無い。

だけれど、おかしくないからこそ問題だった。

「・・・ギンカが魔族だった事にいつ気が付きましたか？」

「え？ ああ、自分から話してくれましたよ。最初は何を言ってるのだと思いますが、あの耳と尻尾を見せられては、信じない訳にも行きませんからね」

デュークさんはそう言って、ギンカの頭とお尻、耳と尻尾に目を向ける。

「魔族は、もっとおぞましい見た目をしていると思っていましたが、何とも可愛らしいお嬢さんですよ。ああ、でもこの事は私と村長しか知りませんからご安心ください。ああ、ケイトも知っているか・・・でも、彼女は言い触らしたりしないでしょう」

「そう、ですか」

僕は、とりあえず安心して溜息を吐いた。

ばれたのではなく、ばらしたという事はギンカが、信頼できると判断して話したのだろう。それならば、問題は無いだろう。

ギンカの人を見る目が正しければ、だが。

「それにしても、一体どのような事をすればそれだけの傷を負うのか不思議ですよ。まるで内側から破壊されたような不可思議な傷ばかりでしたからね。正直助けられるかどうか自信はありませんでした。

ここは、大した設備ありませんからね。かといって、他の病院に運び込む時間も労力も無い。状態が安定するまで緊張状態が続い

ていました。

きつと、ギンカさんの甲斐甲斐しい看病が効いたのでしょうか。一か月間毎日毎日、起きないあなたに語りかけながら看病する様子は、おかしい話ですが男として嫉妬すら覚えるほどでしたよ、いや、お恥ずかしいですが、私の家内なら――」

「ちよつと、待ってください。今なんて言いました？」

僕はデュークさんの言葉を遮る。

「ん？ ああ、申し訳ない。嫉妬なんて私も恥ずかしいのですが――」

「ちがいます。そこじゃなくて・・・」

回りくどいのはいい。

単刀直入に聞く。

「僕はどれぐらいの期間目を覚まさなかったんですか？」

僕の言葉に、デュークさんはパチクリと瞬きをしてから「ああ、そうですね。そこを話していませんでした」と、一つ間を入れて。

「約一か月間、正確に言うなら三十七日間あなたは目を覚ましました」

そう、僕に告げた。

お知らせ

申し訳ないのですが、今の書き方で進めていくと自分の書きたい作品が書けないという事を今更ながら気が付きました。

おせえよ、僕も自分でそう思います。

どうぞ罵っていただいて結構です。というか、いつそ罵ってください。

自分でもかなり自己嫌悪状態ですが、恥ずかしながら書き直しをしようと思います。弄りたいところも多々あるのでこの機会に行います。

今作品を少しでも面白いと思ってくださった方がいらっしゃったら、そちらの方も読んでください。

タイトルは『最弱の勇者く〇〇く』という風にしたいと思います。

結末まで書ききれるか、自分でもわかりませんが最大限努力する所存ですので、どうかよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8960s/>

最弱の勇者

2011年6月19日20時22分発行